

葛飾北斎画『北越奇談』と作者橋崑崙についての調査

荒井美礼

はじめに

葛飾北斎が挿絵を手がけた版本作品に、『北越奇談』という作品がある。

文化十年(一八一三)に刊行された怪談などを収めた読本作品で、著者は越後の橋崑崙という人物だが、この人物についてはあまり史料が残されていないため新潟でも「無名」といわれることが多い。しかしこの無名である崑崙が著した『北越奇談』の挿絵を、江戸の人気絵師だった葛飾北斎が描いていることは興味深いことである。また、近年新潟では、妖怪に関する研究も盛んに行われているが、その一因として新潟県内に設立された新潟県民俗学会や新潟妖怪研究所などの研究機関の存在も大きい。新潟は全国的に見ても民俗学の分野で妖怪研究が盛んだと言われているが、今回はその理由についても合わせて調べたい。

この調査・研究ノートは、今回取り扱う『北越奇談』に焦点をあて、作品と著者橋崑崙について調査・考察するとともに、新潟における妖怪研究についても探るものである。

一 『北越奇談』とその著者橋崑崙

(一) 橋崑崙

まず『北越奇談』の著者である橋崑崙について紹介したい。崑崙については残された史料の少なさから不明となっていることが多いのが現状だ。そのため「無名」の人物と呼ばれることも多い。

本名は茂世(しげよ、またはもせい)。新潟県寺泊町が発行した『寺泊町史』によれば、崑崙は越後寺泊にあった浄花庵(現在の当新田、万福寺)に生まれたとされる。父は信濃国須坂(長野県須坂市)の荘官であった高井忠治郎⁽²⁾、母はその浄花庵の当時の住職であった大森氏の娘、妙了(法名)であると伝わる。活躍した場所については諸説あるが、『北越奇談』に書かれた柳亭種彦の序文には、「崑崙先生は遥に北越三条にあり」との記述もあり、三条(新潟県三条市)であったことが推測できる。『寺泊町史』には、葛塚(新潟市北区辺り)、池端村(新発田市)などにしばらく住んだ後、文化七年(一八一〇)から八年頃三条に移り住んだとの記述も見られる。出生年については、長い間不明となっていたが、江戸の儒学者であった亀田鵬齋⁽⁴⁾が崑崙五十歳の時に送った祝いの漢詩があり、そこから宝

曆十一年（一七六一）であると判明している。

明治から大正期にかけて、政治や文化などの多方面で活躍した坂口仁一郎（阪口五峰）が著した『北越詩話 卷三』には、崑崙本人について「吾州の異事異聞を搜羅し、北越奇談六巻を著す。」と記されており、この『北越奇談』編纂にあたり、新潟県の各地を周りながら色々な珍事や不思議な話を調べて収集・記録していたという事が窺える。

新潟県で人々に深く親しまれている良寛や同じ越後出身の文人で『北越雪譜』を著した鈴木牧之と比べれば知名度は下がるものの、今回取り上げる『北越奇談』を執筆し、郷土についての記録を残した人物としては、重要な存在であると言える。

（二）『北越奇談』について

『北越奇談』は文化十年（一八三三）に刊行された全六冊の版本作品で、越後に伝わる怪談などを収めた随筆書であり、校閲は江戸の一流戯作者柳亭種彦、挿絵は江戸で人気を博していた浮世絵師葛飾北斎、版元は北斎の代表作である風景版画「富嶽三十六景」などで知られる永寿堂西村屋与八である。なお、柳亭種彦による序文の署名には、「文化八年辛未蘭秋」と記述があることから、資料上では文化八年序刊とも記される場合もある。続く明浦漁人林成の文には、「文化六年己巳初冬」と記述が見られる。

巻末に記された「北越橋崑崙茂世著述、東都柳亭種彦校閲、同葛飾北斎補画」からは、北斎が挿絵を担当した事が分かり、柳亭種彦の序文にも、「画は北斎翁の筆なれど画翁の盤多をたすけんと崑崙子のした絵のまゝに彫するもの四枚 かたわらには茂世の印をおしたり 印なきは悉く北斎翁の画なり」とあることから、「北斎補画」つまり、北斎が挿絵の作画を助けたとはあるものの、実際には本文の挿絵のほとんどは北斎が描いているという事となる。『寺泊町史』には、下絵は全て崑崙が描いたとされて



図1 『北越奇談』より橋崑崙による挿絵と「茂世」印の例
／北斎館蔵
画面右上には、「茂世」の判が見える。茂世は崑崙の本名である。

いるが、それについて記述した史料が残されていないため、定かではない。「崑崙画」と確認できるものは、種彦の序文の通り四点のみである。また種彦は序文で、先生（崑崙）の意志とは異なる点もあるかもしれないが、校閲を経ずに出版に至ったという旨を述べている。これについては江戸と越後の距離の問題の他にも「無名」である崑崙の絵では売れないと判断し、江戸で人気を博していた北斎に挿絵を依頼し、描き直させたという可能性も否定できない。

この『北越奇談』は、鈴木牧之が著した『北越雪譜』と並び越後の二大奇書と呼ばれている。先に述べたとおり、江戸一流の戯作者である柳亭種彦が校閲を務め、北斎が挿絵を描いたという事で当時たちまち話題になり多くの人々に読まれたと伝わる。なお、その理由として、「富嶽三十六景」と同じ版元だったため」と記述する資料を幾つか目にするが、「富嶽三十六景」の発表年は天保二年から四年（一八三一～一八三三）にかけて